
聖山探偵事務所

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖山探偵事務所

【Nコード】

N6150B

【作者名】

流水郎

【あらすじ】

時は近未来。科学技術は大いに発達し、人類は宇宙にも進出。しかし、人間型ロボットの社会進出は失業者問題もあって足踏み状態。そんな時代に、地球で探偵事務所を営む一人の男。彼の元に、ある奇妙な依頼が舞い込みます…。武術の達人にして無類の新撰組好きのグータラ探偵と、その周りの人間・ロボット達を中心に巻き起さる、ギャグ有り、シリアス有りの物語です。（すみません、更新停止です）

第一回・依頼人、来る（前書き）

初の連載小説になります

第一回・依頼人、来る

『今回開発された新型のテストロボット。彼らは人工頭脳に簡易的な「心」と自らを向上させる『自己育成プログラム』を内蔵し…』

ピッ

「面白い番組、やってねーな」

所長はそう言ってテレビを消しました。

さて、時は近未来。

科学は発達し、人類は宇宙に巨大なコロニーを作ること成功。さらに月、火星へも移住し、人口爆発による食糧問題・資源不足などは解決されました。

で、そういう時代に地球で探偵事務所を経営する私達。

「あーあ、近頃ろくな番組やってないよ、なんなのコレ。何やってんだよテレビ局」

とかぼやいているのは、所長の「ひじりやま聖山まこと誠」。24歳。

普段は「究極のフヌケ」「至上のグータラ」と称される人物だけど、実は天才的な武術家。

いざというときには空手や柔術、剣術で危機を切り抜けます。

とはいえ普段は本当にグータラ。

剣の稽古は毎日やってるけど、酒飲んで物を壊すわ、「新撰組最高だアアアアー！」などと意味不明なことをほざくわ、ついでに魔法とか妖怪とか幻想世界関連にやたらと知識持ってるわ：ほんとうにどうしようもない物体です。

で、私はその助手の「東風^{ひざけ} 玲奈^{れいな}」。18歳。

この事務所で所長の助手 兼 参謀 兼 ツツコミ役をしております。

職員は僕らの他に十数名。

年齢や出身もみんなバラバラで、今はあちこちに散っています。

「所長、今月に入ってからまだ仕事ありませんね」

「まあ、まだ今月に入って一週間くらいだろ。それに俺らが暇なのは、世間が平穏だってことで：あ、でも俺らにとっては死活問題だよな：」

「先月もあんまり収入有りませんでしたからねえ。それに今ニュースでやってたロボット、どうも警察で働くみたいですよ。そっちの方が信用できるからって、うちのお客が減るんじゃないですかねえ？」

「何言ってんだよ。問題解決はしたいけど警察沙汰にはしたくないっていう連中のために俺らがいるんだろうが。それにな…」

所長はそう言って、マグカップの底に僅かに残っているコーヒーを飲みました。

ちなみにそのマグカップは、「近藤勇」「土方歳三」「沖田総司」

「長倉新八」などの新撰組隊士の名がビッシリと刻まれているという、何処で売っているのかすら解らない妙なカップです。

やっぱり名前が「誠」だからでしょうか？

「どんなにAI（人工知能）が発達しようとなあ、やっぱりからくり人形には任せられない問題ってものもあるもんさ。血の通った人間だからこそ信頼して洗いざらい事情を話し、手を握りあえる。それが人情ってやつさね」

確かに、考えてみればそのとおりですよ。

やっぱり相手が機械だと、なかなか相談しづらいこともあるだろうし…

ちなみに、現在人間型のロボットは開発されていますが、それほど社会に進出してはいません。

その最も大きな理由は「失業者問題」です。

大昔、イギリスで産業革命が起こったときも、産業の機械化によって失業者が増加し、ラダイト運動という機械破壊運動が起こりました。

その時は機械を動かすのはあくまでも人間だからまだ良かったのですが、AI搭載の人間型ロボットが実用化されれば人間自体がいらなくなっちゃいます。

そんなわけで、本当に深刻な問題なんですよ。

タカタカタッタターン♪

え、今のは何の音かって？
インターホンです。
うちの事務所の。

「おっ、客かな。玲奈、出てくれ」

「はい」

僕は玄関に駆け寄って、ドアを開けました。

「こちら、聖山 誠さんの事務所ですよね？」

そこにいたのは、ショートヘアーで耳にピアスをつけた若い女の人。
顔は綺麗だけど、可愛らしいというよりは引き締まった美貌でした。

「はい、私は助手の東風と申します」

「あら、まだこんなにお若いのに助手なんて、きっと実力があるの
ね」

大正解！

そう、僕はこれでも中国武術などを…

と、それはどうでもいいとして：

「いえいえ、それほどでも。お仕事の依頼でしょうか？」

「ええ、警察の者です。聖山さんに少々お頼みしたいことがありますて…」

「あつ、そうなんですか。じゃあ、どうぞ上がってください」

「ありがとうございます」

彼女はそう言うのと、玄関の中にゆっくりと入ってきました。

私がサツとスリッパを出すと、彼女は再びお礼を言って部屋の中に入り、私は彼女を所長の部屋に案内しました。

所長は彼女が入ってくると、読んでいた漫画雑誌を卓上に置き、彼女に椅子を勧めました。

「あれ？ 貴女は確か、警視庁の森川さん？」

「覚えていてくださって嬉しいですわ」

どうやら、所長とはお知り合いみたいです。

「それにしても、変わった音のインターホンですね」

「聞いただけでレベルアップしたような気分になるでしょ？」

なるかぁ　！　某有名RPGのやりすぎなんだよ　！

「はい、力と素早さとMPがそれぞれ2ずつ上がりましたわ」

乗ってきた…このどうしようもないギャグに乗ってきた…

なんなんでしょう、この人…

「おい玲奈、お茶はどうした　？」

「あっ、すみません、すぐ淹れます」

「いえいえ、お構いなく」

私がお客様用の紅茶を淹れている間、二人はお話を続けていました。

「最近開発された、警官ロボのテストタイプをご存じでしょうか？　外見も10代の少年を意識して、今の子供達に正義を教えるという意味も…」

「はぁ」

所長はやる気の無さそうな声で応じます。
興味無しのようにです。

「従来の人間型ロボと比べ、運動能力、解析能力共に優れ…」

「ロボットが凄いつてのは解りました。で、用件は　？」

「それがですね…あつ、ありがとうね」

私は卓上に紅茶の入ったティーカップを置くと、近くに立って二人のお話を聞きました。

「用件はですね…そのロボット3体の教育を、貴方に依頼したいのです」

：

な

な

「「なんですとお　！　？」」

私と所長は同時に絶叫しました。

「そのテストロボットというのは…」

森川女史はそれを無視して、資料を広げながら話を続けます。

「自らを高めていく『自己育成プログラム』のテストを兼ねたロボットで、そのために治安維持の活動において大切なことや、人とのつきあい方などを、武術の達人でもある聖山さんをお願いしたいのです」

「いや、武術は関係ないんじゃない？」

「できることなら柔道や剣道などもロボットに教えていただきたいのです。そうやって人間ともふれ合わせるといふ…」

「いや、でも俺はあくまでも探偵なんで…」

「そこをなんとか…お礼はこの通り…」

そう言って、彼女は懷から小切手を取り出しました。所長はその小切手をしげしげと眺め、

「こりゃあ…警察もなかなか太っ腹なもんだ」

「如何でしょうか？」

しばらくの間所長は考えていたけど、やがて、

「まあ、とりあえずそのロボットに会ってみないとね」

と、言いました。

「解りました。では、明日は空いていらっしゃいますか？」

「明日は一日中、特に予定は無いですがね」

「では、明日の午前11時、科学省ロボット開発ラボに来ていただきますか」

「はいはい、明日の朝ね…解りました、参ります」

……

その後、少しして森川さんは帰っていきました…が。

「…所長」

「…なんだ？」

「大丈夫なんですか？ ロボットの教育なんて…」

「…………だからよ、まずはロボットに会ってみないと…それに…」

所長はふと、森川さんからもらった小切手を僕の方に差し出しました。

そこに書かれていた数字は…

「さ、三千万！？」

「一緒に置いていった説明書によると、三年契約らしい」

「つ、つまり、ロボット三体を三年間教育して三千万ってことです

か？
」

「うん。俺、警察のお偉いさんとは…まあ昔いろいろあったり、ロボット開発の研究者とも結構付き合い有るし、それにこの報酬だから、断るのもなあ…。何にしろ、明日科学省に行ってみないことには始まらねーよ」

そう言いながら、再び漫画雑誌をペラペラと読み始めました。

聖山探偵事務所の奇妙な物語が、これから始まります…

第一回・依頼人、来る（後書き）

次回、ロボット三体の登場です。
早いうちに仕上げようと思っています。

第二回・ロボット、事務所に入る（前書き）

ロボット三体の登場です。

第二回・ロボット、事務所に入る

車のクラクションの音が響く都会の道路。

車と言っても、現在使われている車は低空で飛行する、所謂エアカーですが。

「この建物ですね」

「ああ」

私は『科学省 来客者用駐車場』と書かれた門をくぐって、空いている場所にエアカーを停めました。

「さて、10時55分：きっかり五分前だな」

「じゃ、行きましょうか？」

「ああ、帰りにソバ屋行きたいし、さっさと済ませよう。早く行かないと込むからな」

そう言うところ長は、護身用に持ち歩いている十手を懷に隠し、建物の中へと足を踏み入れました。

え、なんで十手かって？

知りません、趣味でしょ。多分。

そして、受付の人に用件を話し、手続きを済ませます。

「担当の平井 久国ひらくにさんは、三階のロボット開発ラボでお待ちして

おります」

受付嬢は所長にそう言いました。

「平井：そうか、やっぱりあいつが関わってるのか…」

所長はやや呆れたような表情で、そう呟きます。

「知り合い：ですか？」

「高校の頃同期でな」

所長はそう言うのとエレベーターに向かって歩き出し、僕もそれに続きました。

……

キンコーン♪

エレベーターのドアが開き、私達はエレベーターから降りました。

「えーと、開発ラボってのはこっちか…」

所長と私は「失礼します」と言って、広いラボの中に入ります。

「おおーっ、我が大親友・聖山よ！」

やや太った男性が、そう言って私達を迎えました。

「誰が大親友だ。友達ではあるが大親友ってほど親密な仲間じゃなかったはずだぞ」

「まあまあ、とりあえず椅子を用意したから座りな」

平井氏はそう言いながら、私達に椅子を勧めます。
周りにはロボットの部品やパソコンなどが散らかっています。

「で、俺に面倒見て欲しいロボットってのは？」

「うん、僕のチームで作ったんだけどさ…」

平井氏がそう言ったとき、ラボのドアが開き、軽い足音と共に三人の少年が入ってきた。

「Dr. 平井、準備完了しました」

「そうか。聖山、こいつらがそのロボットだ」

平井氏はそう言いました。

一人は三人とも黒いジャケットを着ていて、右側に立っているのは体格から言えば大体15歳くらいで、髪の毛は短めです。

真ん中に立っているのは、腰まで長髪を垂らし、顔もかなり美形、年齢は人間で言えば18歳くらいでしょうか。

最後の一人は、10歳前後くらいの子供の姿です。

「まず、右に居るのはA-307CHタイプ。白鷺しらさぎと呼んでいる。三体の中で最もバランスがいい。真ん中に居るのがA-408RHタイプ。呼び名は鳶とび。運動能力はこいつが一番優れてる。んで、左に居るのはA-555EHタイプ。呼び名は夜鷹よたか。感情は一番豊かなはずだ」

「で、こいつら三人を教育しろと？」

「ああ、まあ武術を教えたり、いろいろな所に連れていったり…そんな感じで」

「まあ報酬も高いし、構わないけどさ。うちで面倒を見るからには職員として扱うし、仕事もやらせるぜ」

「勿論OKだ。もし破損したりしたら、連れてきてくれれば僕が修理する。それと、こいつらのエネルギー、半年分渡しておくな」

そう言って平井氏は、三センチほどのカプセルがギッシリと入った大きめの瓶を三つ、コンビニのビニール袋に詰め込んで所長に渡ししました。

「これで半年分？」

「ああ、そのカプセルを一日三回摂取させればいい。人間用の食べ物も食べられるが、基本的なエネルギーはこのカプセルから得なければならぬんだ。無くなる頃にはまた送る」

「解った。ほれ」

所長は私にその瓶の入った袋を渡して立ち上がると、三人のロボットに向かって言いました。

「えー、俺が聖山 誠。そしてこっちが助手の東風 玲奈だ。お前達は今日から新撰組隊士：ではなく、うちの事務所で働いてもらう。結構危ないこととかあるから、心してかかるように。以上」

「じゃあ聖山、頼むな」

「ああ。じゃ、行くぞ」

所長がそう言うと、ロボット達も「はい」と答えて後に続きます。

そして廊下に出たとき、

「ねえねえ」

と、A—555EHこと夜鷹君が私に話しかけてきました。

「さっき言ってた新撰組って、なんのこと？」

「えーとね、新撰組って言うのは、江戸幕府の終わり頃に活動した集団よ。浪士によって構成されていて、テロの取り締まりなんかを行ったの」

「江戸幕府：徳川家康っていう人が開いた幕府だよな？」

「そうよ。…なんだか夜鷹君って、本当に無邪気で…本物の人間み

たいだね」

私は少し驚きながら言いました。

人工頭脳を搭載した人型ロボットを見たことは何回かあるけど、ここまで感情が豊かなロボットは初めてでした。

「エヘヘ、でも白鷺と鳶は無愛想だよ。まあ白鷺はまだマシだけど、鳶なんてもうほぼ感情は無いね。というか、感情自体無駄だと思ってるかも」

言われてみれば、確かにA-408RHこと鳶さんは完璧に無表情で、なんとなく近づきづらい感じがします。

「でも僕も人間と違うところはあるよ」

「え、例えば？」

「人間だったら、違う名前と呼ばれたときに違和感があるでしょう？でも僕らロボットは、新しくつけられた名前をすぐにインプットできるんだ」

「成る程ね」

その後、私は夜鷹君と話しながら、所長や白鷺さん、鳶さんの後に着いて科学省のロビーまで降りてきました。

その時です…

「聖山 誠 ！ ！」

怒鳴り声がロビーに響きました。

咄嗟にその声の方を見ると、そこには中学生くらいの子供が、目を怒らせ、手にナイフを握り、私達を、正確には所長を睨み付けていました。

周りの人たちがざわめき出します。

「こ、殺してやる…」

「坊っちゃん、刺客ごっこは余所でやりな」

どうやらその子供は本気のようにですが、所長は何でもない物を見るようにその子の方を見えています。

「聖山さん、下がって…」

白鷺さんと鳶さんが所長をかばうように前に出ますが、所長はそれを止めました。

「お、俺の親父は…お前のせいで警察に捕まったんだ ！」

子供はナイフを握ったまま、体をガクガクと震わせながら言いつつ、所長にジリジリと近づいてきます。

「なんだか知らねーけど、そりゃ逆恨みでないかい ？」

「うるさい　！　俺にとっては、誰よりも大事な親父だったんだ
！　麻葉の密売をやっていたようと、一人しかいない親父なんだ　！
なのに…なのにお前のせいで…」

「麻葉…ああ、あの時の…」

どうやら所長は心当たりがあるようです。

「で、俺を殺したらどうなる　？」

「な、なんだと…　？」

「俺を殺したところで、お前の親父は刑務所からは出られない。それに、お前にとってはいい親父でも、他人から見れば所詮はただの悪人だ」

「て、…てめえ…」

「どうした、刺すなら刺してみろ」

所長は凄い気迫で言います。

ようやく武術の達人らしく見えるシーンです。

そしてその数秒後、ナイフが地面に落ちる、否、叩き落とされる音が聞こえました。

所長が懷からサツと十手を取りだし、その子供の手を打ってナイフを落としたのです。

子供は地面にガツクリと膝を着き、ようやく駆けつけてきた警備員に取り押さえられ、連れて行かれました。

「聖山さん」

白鷺さんが所長に話しかけました。

「何故、先ほど僕と鳶を止めたのですか？」

「今のガキの目をみりゃ、興奮状態で錯乱していることぐらいは解る。ああいう奴に下手に手出しをすると、やたらめったらに刃物振り回したりして危ないんだよ。怪我人が出るかもしれない。よく覚えておけよ」

「了解しました、データに付け加えておきます」

その後、私達は警察からの事情聴取を受けた後、ソバ屋で昼食を済ませ、事務所に帰りました。

「…さて、これがうちの事務所の規定である。よく読んでおくように」

所長がそう言って、ロボット三人に小冊子を渡しました。

「第一条…親や友達に見られても恥ずかしくない仕事をすべし」

白鷺さんが一文を読み上げます。

「第二条…チームの和を乱すべからず。第三条…収賄、横領、強請、弱い物イジメ、その他事務所の信用を落とす行いをする者は切腹」

「…切腹？」

夜鷹君が疑問符を浮かべます。

「ああ、介錯は俺がしてやる」

「第四条…食べ物を粗末にするべからず。第五条…金を無駄遣いするべからず。ただし、金金と騒ぐ者はみっともないから切腹…（中略）…第三十条…義侠心を忘れるべからず」

「…義侠心って？」

夜鷹君が尋ねます。

「道理を通すことさ」

そう言いながら、所長は自分の机の側に置いてある日本刀の手入れを始めました。

ちなみにその日本刀は、特殊金属製高周波日本刀と言って、切れ味は凄まじく、鉄の塊でもチーズのように斬れるという凄まじい業物で、銘を「時雨裂しぐれさき」と云うそうです。

…何処で所長がそんなものを手に入れたのかは解りませんし、所長が実戦でそれを使うのは見たことがないですが（でも物を斬って見せたことはあります）…

白鷺さんが規定を読み上げている間中、鳶さんはずっと無表情で座っているだけでした。

本当に彼は機械的な印象がします。

と、その時：

タカタカタタタターン♪

インターホンが鳴りました。

「あつ、誰か来たぞ。鳶：いや、白鷺、お前が出る。鳶じゃ無愛想で相手が引く」

多分所長は、さっきから無口な鳶さんをわざと怒らせてみようと思ったのでしよう。

しかし、鳶さんは相変わらず無表情のまま、沈黙を続けまします。

そして、玄関から白鷺さんが戻ってきて、言いました。

「聖山さん、東風さん、依頼人です」

第二回・ロボット、事務所に入る（後書き）

次回、ロボット達の初仕事です。

アクションシーンも多めにする予定です。

第三回・聖山、尾行する（前書き）

お待たせしました。

ちよつと変なところがあるかもしれませんが…

第三回・聖山、尾行する

「おう、ちょっと待て。机の上片づけるから」

そう言って、所長は机の上に置かれていたゲームソフトやらシヤア専用ザクのプラモデルやら『新撰組大全』やらを一つの段ボール箱に詰め込んで、机の下に隠しました。

しかし愛刀「時雨裂」の手入れだけは続けています。

やがて、白鷺さんに案内され、依頼人の女性が入ってきました。歳は20際前後でしょう。

質素な格好ですが、綺麗な顔でした。

彼女は日本刀を持っている所長を見て少し驚いたようですが、私が椅子を勧めるとお礼を言って座りました。

「ご用件は？」

「わ、私は…今日の昼間に、科学省であなた方を襲った中学生の姉で…その節は大変なご迷惑を…」

「ああ、そうっすか…。えーと、後は鰐を…」

と、所長は依頼人よりも刀の手入れの方に集中しています。

「それで、どのようなご相談でしょうか？」

しょうがないので私が相手をすることにします。

「それが：私達の父親は何ヶ月か前に、麻薬密売の容疑で警察に逮捕され、今火星の刑務所に収容されています。聞いたところによると、この事務所の調査によってそれが明かになったとか…」

「ええ、確かにうちの事務所で調べましたよ」

と、所長が言います。

「一体、誰から頼まれて調査を　！　？」

女性の声が高ぶります。

「こういう仕事は、依頼人の情報を他には漏らさないということが基本でね。商売は信用第一、解りますね　？」

所長は刀の鐔を研きながら言います。

「あ…す、すみません…。それで…その…」

女性は少し躊躇いながらも、言いました。

「私の彼氏も、麻薬をやっているのかもしれないんです」

「その人の様子が変なんですか　？」

所長は刀の手入れに夢中なので、私が話を聞くことにしました。

「はい、最近頬が痩けて、口調もちょっと荒々しくなって…それに、四日ほど前に彼の家に行ってみたら、机の隅に注射器が置いてあったんです。あと、なんか悪い仲間と付き合っているみたいなんです」

「成る程…」

「もし彼が麻薬をやっているのなら、もしかしたら父とも関係があるかもしれませんが…やっていなかったとしても、最近彼の様子が変わったのは何か理由があるはずです。調べていただけませんか？
お金はここに…」

そう言って、彼女は封筒を差し出しました。

「…いいでしょう」

刀の手入れを終えた所長が、そう言いました。

……………30分後……………

「ここが、その彼氏が下宿しているアパートですね」

私達は、依頼人の彼氏が出かけるのを見計らって尾行することになりました。

彼氏の名前は進藤 しんどう 弘和 ひろかず、19歳。
大学生です。

「今時珍しいボロアパートだなあ」

「ですよねえ…なんでも最近このアパートに越してきたらしくて、それまではもっと立派なマンションに住んでいたとか…やっぱり麻薬にお金かけたせいで、家賃の安そうな今のアパートに…」

「ま、調べてみないことには解らないけどな。いざとなったらカツ井食わせてやればいい。そうすれば100%白状するから」

「古いですよ、それ」

私達がそんな会話をしていたとき、

「聖山さん、出てきたみたいです」

白鷺さんがアパートの二階を指さしました。

一人の男性が降りてきます。

「依頼人から受け取った写真と一致するね」

私の隣で夜鷹君がそう言うと、所長は静かに立ち上がりました。

「よし、車じゃなくて徒歩でどっかに行くみたいだな…。じゃあ、俺と白鷺が先に尾行するから、玲奈、鳶、夜鷹はその後から距離を取って尾行しろ。でもって俺らにもしものことがあったら、お前達だけで尾行を続けろ」

「了解。気を付けて」

私がそう言うと、所長は白鷺さんと一緒にこっそりと進藤氏の後を着け始めました。

そして、そのしばらく後に私達も追跡を開始しました。

~~~~~

みなさんこんにちは、人間型A IロボットA-307CH、コードネーム「白鷺」です。

本来この話の解説役は聖山 誠さんの助手である、東風 玲奈さんの担当ですが、今別行動をとることになったので、しばらくの間僕が解説を務めます。

「白鷺、『こんにちは』ってのは昼の挨拶だ。早朝や夜に読んでいる人のために『おはよう』『こんにちは』『こんばんは』を合体させて『おはこんばんちわ』と言うようにしろ」

「了解しました、データにインプットしておきます」

さて、今私は聖山さんと二人で依頼人の彼氏である進藤を尾行中です。

聖山さんの尾行のやり方は、僕のデータに入っているものと違うところが結構ありますが、一緒に付き従っている僕でさえ尾行をやっ

ているという感覚が無くなってしまふほど自然です。

そもそも聖山さんは和服を着ているのでかなり目立つし、その上履いているのは下駄なので、普通気づかれるはずなのですが…  
これが実戦経験という奴でしようか…

「ん、路地裏に入っていくな…」

聖山さんは静かに忍び寄り、こっそりとその路地裏の中を覗きました。

私も聴力を倍にして、会話を探ります。

『金はあるのか？』

『も、もう少し…もう少ししたら必ず払う…だから、アレを…』

『やれねえな。てめえ、今まで何万貯め込んでると思ってんだ？』

『た、頼む…アレが無いと…』

『うるせえ！』

次の瞬間、鈍い打撃音が響きました。

「…白鷺」

聖山さんが、低い声で言いました。

「探偵つてのは、余計なことはしちゃいけないんだが…これは無視できない状況だ。玲奈達に、早く来いと伝えろ。それから警察呼べ」

聖山さんはそう言うと、路地裏の中に躍り込んでいきました。

そして、倒れていた進藤氏を蹴りつけていた一人の男の胸ぐらを掴んで、一瞬で地面に叩きつけます。

僕は鳶・夜鷹、そして警察署に電波信号を飛ばすと同時に、進藤氏を引きずり出して、彼を守る体制をとります。

「な、なんだてめえらは！？」

チンピラ達がざわめきます。

「劉玄徳の義弟にして三蔵法師の弟子、梁山泊の好漢・ヒジリーマンだ！」

聖山さんは僕の電子頭脳では理解不能な名乗り方をしました。

そして、劉玄徳の義弟にして三蔵法師の弟子である梁山泊の好漢・ヒジリーマンこと聖山さんは、次々とチンピラ達をねじ伏せます。

「ちっ、死ね！」

チンピラの一人がナイフを取り出します。

僕は咄嗟に手を伸ばし、そのナイフの刃をキャッチしました。

僕の手の中で、刃は粘土のように潰れていきます。

もちろん、僕の人工皮膚には傷一つつきません。

「なっ…！？」

チンピラが怯んだ瞬間、聖山さんがそいつを背負い投げして地面に叩きつけます。

5人いたチンピラも、聖山さんが全員叩きのめし、地に伏して呻いていました。

スポーツ化された柔道ではなく、実戦で相手を殺さずに制す、見事な柔術です。

「所長ー！」

玲奈さんの声が聞こえました。

見ると、玲奈さん、鳶、夜鷹の三人が駆けつけてきます。

「玲奈、遅いつつーの。どんだけ距離とってたんだよ？」

「すみません、散歩してたお爺さんにぶつかってしまっ…」

「まあいいや、とりあえずこのクソガキ共を逃がさないようにして…白鷺、警察を呼んで…」

「先ほど、近くの警察署に電波を飛ばしましたから、もうすぐ来ると思います」

僕がそう言うと、所長は「へえ、便利だなあ」と言って、丁度立ち上がりとしていたチンピラの一人の背中を踏みつけました。

「おっと、もうすぐお巡りさんが来るから、それまで寝てな」

これは事情を知らない人が見たら、聖山さんが悪役に見えるでしょ

うね。

「た、頼む…見逃してくれ…そうじゃねえと、俺達…」

チンピラが涙を流しつつ嘆願し始めたとき、僕と鳶、夜鷹の爆発物センサーが反応しました。

【空中に要人暗殺用範囲限定爆弾を確認。周囲の人間を守れ】

センサーと電算機はそう指示しました。

僕が聖山さんを庇おうとする一瞬前に、聖山さんが叫びます。

「散れ！」

聖山さんはそう言うなり、倒れている進藤氏をさっと抱え、もう片方の腕で僕を路地裏から外の方に突き飛ばし、玲奈さんは夜鷹を抱きかかえて路地裏から脱出を計ります。

落下してきた爆弾はビー玉くらいの小型の物で、しかも聖山さんは爆発物センサーなど持たない人間なのに、その存在に気づいたのです。

そして、宙から落下してきた爆弾が地面に触れるかと思ったその瞬間。

何かが風のように動き、その爆弾を空中へと蹴り飛ばしました。

動いたのは鳶です。

僕らの中で一番運動機能に優れた鳶に蹴り飛ばされた爆弾は、僕らから20メートル以上上に飛んだところで、轟音と共に爆発しました。

「…みんな、無事か？」

聖山さんが言います。

「大丈夫です。鳶さんのおかげで助かりました」

玲奈さんも、額の汗を拭って答えます。

「あの爆弾は、あの窓から落とされたみたいだな」

聖山さんはそう言って、すぐ側の廃屋の窓を指さします。

僕はセンサーを起動させ、その廃屋をサーチしました。

やがて僕の電算機は、【生命反応、無し】という結果を出しました。

「廃屋の中からは、生命反応を探知できません」

僕がそう言うと、聖山さんは地面にうずくまって震えているチンピラの一人を見やって、

「おい、もうすぐ警察が来るから、そしたら知ってることを全部話しな。そうすりゃ警察が守ってくれるだろ」

聖山さんがそう言った時、ようやく警察が駆けつけてきました。

そして僕らはしばらくの間警察から事情聴取を受け、やがて解放されました。

そして、進藤氏のアパートの近くに停めておいたエアカーに乗り、事務所に帰ります。

「さーて、帰って依頼人に電話するか」

聖山さんがそう言ったとき、夜鷹が東風さんに話しかけました。

「ねえ東風さん、ああいう風に危なくなったとき、僕のことを庇ってくれなくてもいいよ」

「え…？」

「僕らはロボットだから、人間より頑丈だし、破損したら修理すれ

ばいいんだし。それに何よりも、人間を守るのが仕事だし」

夜鷹がそう言うのと、僕も同調します。

「その通りです。あなた達人間を危険な目に遭わせることはできません。僕らに何かあっても、危険を冒して助けるなどと云うことは……」

僕がそう言うのと、鳶も無言で頷きます。  
すると、聖山さんは、

「玲奈、うちの事務所の規定の第六条を言ってみろ」

「はい。『所員は互いに助け合うべし』」

「そういうことだ、お前らも今はうちの所員だろうが。互いに助け合うんだよ。お前らが危なくなったら俺らが助ける、そして俺らが危なくなったらお前らが助ける。いいじゃないか、別に」

「しかし……」

「ゴチャゴチャ言っていると、口の中に塩詰めて縫っちまうぞ？」

聖山さんは五月蠅そうにそう言います。

「それじゃゾンビですって」

と、東風さんがツツコミを入れます。



「とにかく、今日は帰って、電話で依頼人に報告する。明日は柔術教えてやるから、事務所の地下にある道場を掃除しとけ。清潔も強さのうちだぞ。宮本武蔵は剣の腕は良くても風呂に入らなかったせいで、何処にも雇ってもらえなかったっていう説もあるんだからな（※本当です）」

聖山さんがそう言うのと、東風さんが苦笑してアクセルを踏み込み、僕らは帰路につきました。

『互いに助け合うべし』

その言葉を思い出すと、僕の電子頭脳の中に、何か暖かい感情が広がっていきました。

### 第三回・聖山、尾行する（後書き）

思っていたよりもアクションシーン少なかったです（汗）  
こんな作品でもご感想を頂けたら幸いです。  
叩きでも歓迎です。

#### 第四回・“独眼天龍”、聖山を訪ねる（前書き）

お待たせしました。

#### 第四回・“独眼天龍”、聖山を訪ねる

「聖山さん、道場の掃除、終わりました」

白鷺さんが言いました。

進藤氏の尾行の翌日。

今日は所長が、ロボット三人に武術を教えるそうです。

ちなみに昨日の依頼人にはちゃんと話をつけ、また、警察は麻薬を商っていたチンピラ達のバックにもっと大きな組織がいると見て、捜査を続けています。

範囲限定爆弾なんて物が降ってきましたし、確かにヤバイ組織が絡んでいそうです。

「玲奈、お前ちょっと白鷺達と一緒に倉庫へ行って、丁度よさそうな道着がないか探してこい」

「あっ、はい」

「間違ってもお姫様のドレスとか持ってくるなよ」

間違えませんよ、誰かさんじゃあるまいし。

とにかく、私は三人を連れ、所長の言うとおり衣類などが置いてあ

る倉庫に向かいました。

ちなみにその倉庫は、鎖鎌、日本刀、槍、刺叉、フランベルジュ（刃が曲がりくねった西洋の剣。斬ると切り口がズタズタになる）、エクゼキューションナーズソード（斬首刀）などなど：

まあ、合法的に所持しているわけですが。

「えーと、この押入ね」

私はその引き戸を開けようとしたが、なかなか開きません。

「大丈夫？」

「ひっかかってるみたい…えいっ！」

再度力を入れて、一気に横に引っ張ってみたところ…

ずさーさーさーっ

「きゃああ　！！」

押入の中から色とりどりの衣類が、雪崩の如く一斉に降り注ぎ、私は為す術もなく生き埋めになってしまいました。

「大変だ、東風さんが埋まった！」

白鷺さん、鳶さん、夜鷹君が慌てて服の中から私を掘り出してくれました。

もう少しで本当に息が苦しくなるところだった：

あの馬鹿所長：なんでこんな大量の服を：

しかも本当にお姫様のドレスまである：

「大丈夫？　とりあえず、柔道着を探そうよ」

夜鷹君が言います。

「うん、そうね」

私達はその大量の衣類をかき分けて、柔道着を探しました。

その際見つかった物リスト

- ・昔の不良が来ていたようなボロボロの学ランと学帽
- ・平安貴族の衣装
- ・海賊の衣装
- ・忍者服
- ・ドルイドのローブ
- ・宇宙服
- ・水戸黄門セット
- ・助さん・格さんセット

- ・ うっかり八兵衛セット
- ・ 孫悟空セット
- ・ 亀仙人セット
- ・ 水色のラッコの着ぐるみ
- ・ しまっちやうおじさんの着ぐるみ
- ・ 某猫型ロボットの着ぐるみ
- ・ 30年前のインスタント・ラーメン
- ・ 『豆腐料理86種』と云う本  
なべぶきようしよ
- ・ 『鍋奉行所』と書かれた提灯  
なんでやねん
- ・ 『難出矢念』と書かれたハリセン
- ・ 『ムラマサブレード』と彫られたパン切りナイフ
- ・ 『ロボットクラッシャー』と書かれたピコピコハンマー
- ・ 『ドラゴンキラー』と書かれた文化包丁
- ・ 『ドラゴンシールド』と書かれたベニヤ板
- ・ 『武田信玄の象徴たる風林火山は元々は孫子の兵法の言葉で、実は風林火山の後に陰、雷霆が続く』と書かれた扇子

その他、ガラクタ多数…。

所長のことだから新撰組セットもあるに違い有りませんが、恐らくそれはこの倉庫ではなく、所長のすぐ手の届く所に置いてあるはず  
です。

さて、そしてようやく、三人にピッタリ合う柔道着を発見できました。

そして私達はそれを持って所長の所に行きます。

「よし、それじゃあ柔道着に着替えて、武道場に行って待ってろ。  
それから、玲奈」

所長は千円札を3枚、私に手渡しました。

「コンビニ行って、米と野菜、あと『週間大江戸伝』買ってこい」

「解りました、行ってきます」

そう言って、私は事務所を出て、コンビニへ向かいました。

街の中はエアカーが走り、所々に警察の犬型メカ・スタンドッグが見回りをしています。街の中はほぼ平穏で、通りには街の人々の笑顔が溢れ：

「あいつ、何処に隠れたんだ！？早く借金返してもらわないと、うちの店の方が破産しちゃう！」

…まあ、笑顔ばかりが溢れているわけではありませんが：

とにかく、私はコンビニで米や野菜、そして所長の読んでる週刊誌などを買い、再び事務所に戻ってきました。

すると、事務所の前に、若い男の人が立っていました。歳は所長と同じくらいで、包帯で右目を隠し、肩に長いバッグをぶら下げています。



ただ者じゃない。

私は直感しました。

体つきやしぐさなど、何らかの武術を心得ているようです。  
目配りにも一点の隙もない：

「あのー、うちの事務所に御用でしょうか？」

私は警戒しつつ、そう尋ねました。

その男性は私の方に振り向くと、

「この事務所の人かい？」

と、尋ねます。

「はい、所長の助手を務めている者です」

「へえ、あいつの助手：さぞかし大変だろうなあ。とにかく、依頼があるんで、取り次いでもらえるかい？」

「あつ、はい。すぐに」

私は玄関を開け、その男性を中に入れると、所長を呼びに行きました。

その時：

ジャラジャラ

ジャラジャラ

ジャラジャラ

こ、この音は…

私は素早く、音の聞こえる方へ向かいました。  
そこには…

「どうだ、当たるなら当たれ！」

「大当たりー！」

「うわっ、それ食うか」

「いくらでも食いますよ」

…道場にテーブルを持ち込んで、麻雀をしている所長達の姿が…

「ちょ、ちょっと！何やってるんですかつ！？」

「おう、玲奈、もう帰ってきたのか」

言いながら、所長は麻雀パイをいじっています。

「おかえり東風さん！僕もう三回も勝ったよ！」

…夜鷹君、無邪気に言わないで。  
怒る気が消失しちゃうから…

「お帰りなさい、東風さん。東風さんもどうですか？」

白鷺さん、その歳で麻雀の道に引きずり込まれたら、オヤジ道から  
抜けられなく…  
まあ、ロボットだから歳は関係ないかもしれないけど…。

「…クツ…」

鳶さん、いつも無表情で無感情なのに何故麻雀でそんなに熱中して  
るんですか。

しかも「…クツ…」って…登場してから初めて喋ったセリフがそれ  
ですか。

「いやー、こいつら教えたことをスポンジみたいに吸収していくか  
ら面白くてさあ」

所長、貴方は麻雀パイの山に生き埋めになりなさい。

「とにかく、依頼人が来ています。麻雀は中断してください」

「しょうがねえなあ…よっころしよ」

所長は立ち上がって、麻雀台を横にどかしました。

「相変わらずだな、“狂雲齋”」

その声に振り向くと、あの男性がいつの間にか部屋の中に入ってきていました。

「お前…“独眼天龍”じゃないか」

どうやら所長の知り合いのようです。

所長の目が、少し真剣になったような気がします。

「まあ、紹介しておくか。玲奈、白鷺、鳶、夜鷹、こいつは小次郎  
Ⅱルトフスキー。父親がロシア人。でもって銃剣術の達人だ」

銃剣：ようするに割と長い銃の先に小型の剣を装着し、接近戦でも  
使えるようにしたものです。

ヨーロッパでは銃剣が発明されたことにより、長槍兵と銃撃兵を区  
別する必要が無くなり、戦術は大きく進歩しました。

銃剣道は木製の『模擬銃』を使って行う武道で、その技法には刺突、  
薙ぎ払いなどがあります。

しかし、銃剣道ではなく銃剣術と言っていますから、この小次郎と  
云う人はスポーツ化された武道ではなく、相当実戦的な技術を持っ  
ているのでしょう。

第一、元々の銃剣は普通の日本刀とかと違って、純然たる『殺し合  
いの道具』ですからね…。

とすると、あの長いバッグに入っているのは本物の銃剣でしょうか

…。

「えーと、小次郎、お前今何やってるんだっけ？」

所長がそう尋ねます。

「宇宙警察の…まあ、特殊遊撃隊で暴れている」

「とっ、特殊遊撃隊！？」

私は思わず叫んでしまいました。

宇宙警察の特殊遊撃隊といえば、宇宙中のギャングが震え上がるほどの能力を持った集団…。

所長、そんな人たちと交流があったなんて…

「で、聖山、今日はお前に依頼がある」

「なんだ？ 彼女の浮気調査か？ それとも飼っている猫でも逃げたか？」

所長：警官に向かってなんてことを…

まあ、確かに探偵の仕事というのは、浮気調査といなくなったペット探しがほとんどなのですが…。

「お前、昨日チンピラ共をぶちのめしただろ？ そいつらのバツクにいた組織っぽい奴らがな、先日火星の第一都市内の兵器研究所を襲撃して、戦闘用ロボットのデータを奪っていった。その際、追撃したスタンドッグ50体と、市街戦用バトルポッド28台が、人

間一人の手で全滅させられた」

「どんな武器を使ってだ？」

「ビームショットガンらしい。名前はレイチャーライン。第一宇宙コロニー出身。国籍はアメリカ。元傭兵だ」

小次郎さんの顔が、さらに真剣になりました。

「その男が今、地球：それも東京にいるという情報が入った。タレコミ調査してもらえるかい？」

「へえ」

所長は立ち上がると、脇に抱えていた愛刀・時雨裂を手に取りました。

「いいだろう、やってやるよ」

「そうか。いやあ、こんなことを任せられるのはお前くらいだからな」

「ま、俺の腕が錆びてないということを見せてやるよ」

「警察の方で調べたデータと、依頼料の前払い分はここに置いていく」

そう言うと小次郎さんは、道場の壁に掛けられた「ええじゃないか」と書かれた掛け軸をちらりと眺めました。

「やっぱり昔と変わってないな。相変わらず、新撰組に狂っているのか？」

「ああ。最高だよ、あれは」

所長はそう答えました。

「新撰組隊士は信念を持った奴らだったが、最期は…」

「わかってる」

小次郎さんの言葉を遮って、所長は言いました。

「俺はそういう面も知った上で、新撰組ファンやってるんだ」

「だろうなあ、お前は昔からチャランポランだったが、相当疑り深いからな。ま、その疑り深さのおかげで、俺も何回か助かったけどな」

そう、所長は結構疑り深いのです。

何をするにもまずは疑ってかかるという人物なのです。

「『疑う』のが基本で、『信じる』のが応用なのさ。疑って疑って疑いまくって、疑う余地が無くなったら始めて信じる。根拠もないのに疑うのは人間として最低だ云々とか、甘っちょろい道徳論唱えるガキもいるが、そいつらはただの馬鹿だな。そもそも人間は疑うことで進歩してきた。何故雨は降るのか、何故火が燃えるのか、何故星は夜にしか見えないのか…ってな。そうやって疑った連中がいたからこそ、ここまで科学が進歩したんじゃないか」

「ああ、お前の言うとおりでな」

小次郎さんは、微かに笑ってそう言いました。

「お前が疑うことの大切さを教えてくれたおかげで、今の仕事も上手くいっている。お前は本当に、探偵事務所なんかやらせておくにはもったいないくらいだ」

「今の俺には：まあ、このぐらいが丁度いいのさ。結構いろいろな奴に会えたしな」

「そうか。ま、お前の性格じゃそうだろうな。んじゃ、あばよ」

そう言って、小次郎さんは道場から玄関へ向かおうとしました。そして、道場から出る一瞬前に私の方を振り向いて、

「このサムライ野郎のこと、宜しく頼むぜ」

と、言いました。

「はっ、はい！」

小次郎さんの一つ目に見つめられて、私はちょっと緊張しましたが、そう答えました。



そして小次郎さんが帰っていった後：

「さて、久々の大仕事だ」

言いながら、所長は再び麻雀を始めました。

#### **第四回・“独眼天龍”、聖山を訪ねる（後書き）**

次回は、聖山が本格的に戦闘をします。多分。

## 第五回・強敵、現る（前書き）

秘密基地で考えてもらったキャラが二人登場します。

## 第五回・強敵、現る

前回、所長の友人の小次郎さんから依頼を受け、我々探偵事務所はレイチャーラインという男の捜索に乗り出しました。

所長はあちこちの店：店と言っても、早い話が「ヤ」の字がつくような人が経営する店なのですが…。

とにかく、いろいろな店を訪ねて情報を集めます。

一緒にいるのは白鷺さんと鳶さん。

ロボットと言えども子供をその道の店に連れていくのは気が引けるので、夜鷹君は留守番です。

「レイチャーライン？ 元傭兵やな。あいつはやばいで。戦争のプロやさかい」

丸いサングラスをかけた中年の男性が、そう言います。

「そこは安心しろ。俺もストーキングのプロだ」

所長、探偵の仕事とストーキングを同列に見ないでください。

「最近はずV社に雇われとるらしいで。まあ、何を企んでおるのか解らへんが…」

「へえ、ZV社…」

ZV社とは、主にレーザー兵器を作っている会社で、現在宇宙軍などで使われているレーザーガンの60%が、そのZV社の製品だと言われています。

しかし、最近その会社には何かと黒い噂が流れているのです。

「聖山はんやったら大丈夫やろから、教えたるで。今日の7時半：駅の裏にある廃ビルで、ZV社が用心棒を連れて何処かと会合を行うそうや」

「解った。ありがとうな」

所長はそう言って、数枚のお札を置いて店から出ていきました。

「聖山さん」

白鷺さんが、所長に話しかけます。

「廃ビルに行くのですか？」

「行くとも」

「危険度78・99%です」

白鷺さんは、警告するような口調で言います。  
でも、聞くような人じゃないから：

「ああ、危険だな。けど行く」

やっぱり所長はそう言いました。

「俺には俺のこだわりがある。こんな中途半端な仕事しただけで、報酬をもらう気にはなれないしな」

「行っってはいけません。危険です」

白鷺さんがそう言うと、所長は、

「なら、お前が俺の側にいてガッチリ守ってくればいい。お前ら、人間よりずっと強いんだろ？」

そう言いながら、腕時計を見ます。

「5時10分か…今から事務所に戻って、刀持ってくるか」

「刀…時雨裂を使うんですか？」

私はそう尋ねました。

「ああ、そうしなきゃいけない相手だろう。多分な」

「…所長、まさか戦う気じゃ…？」

「安心しな。できる限り戦わないで逃げるようにする」

…そして、私達が事務所に戻って装備を調べ、廃ビルに向かって出

発したのは7時20分でした。

所長が「何処かに対レーザー用ベストをしまっておいたような気がするから、それを探しだして着ていこう」とか言うので、対レーザー用ベスト探しに2時間以上費やしました。

ベストを四着見つけたし、所長は夜鷹君を留守番に残して、私と白鷺さん、鳶さんを連れて廃ビルに向かいました。  
やがて到着したそのビルは、もうかなりボロくなっていました。

「聖山さん、このビルには生命反応はありません」

白鷺さんが言います。

「お前らがいると便利だな。レーダー内蔵だし」

「所長、しばらく待ちますか？」

「そうだな、菓子パンも用意したし。張り込みの基本は菓子パンだからな、覚えておけ」

所長がまた意味不明なことを言ったとき、白鷺さんの表情が僅かに変わりました。

「…裏手の方に、誰か来たようです。今レーダーに反応が有りました」

「裏手か。よし、気づかれないように、静かに行くぞ」

所長はそう言って、ゆっくりと歩き出しました。

この時ばかりは物音を立てるのはまずいので、所長は下駄ではなく草履を履いています。

そして、ビルの裏に回ると、会話が聞こえてきました。

「例の物…ちゃんと奪ってきたんだな？」

「ああ。この通りだ」

ビルの柱の陰に隠れて、裏口の中を覗き込んでみると、男性三人が話していました。

短いジャケットを上半身裸で来ている男が、ネクタイを締めてサングラスをした男に鞆を手渡します。

サングラスの男がそれを受け取って中身を確認するのに、その隣にいる日本刀を携えた赤い髪の男は黙って眺めていました。

「…よし、間違いないな。さすがはレイチャーライン。見事だ」

「世辞はいいから、今回の報酬をもらいたいね」

「わかってる」

サングラスの男は自分が持っていたトランクを、ジャケットの男…レイチャーラインに手渡します。

と、その時。

赤髪の男が、蛇のような目つきをして、私達の隠れている方を睨みます。



「どうした？ エリウッド」

「……鼠だな」

そう言って、その男は刀に手をかけました。

その瞬間、私は金属同士がぶつかり合う音を聴きました。

赤髪の男と同時に所長も抜刀し、赤髪の男の一太刀を受け止めたのです。

「…先に逃げてろ」

赤髪の男はサングラスの男にそう言うと、刀を握り直して再び所長に斬りかかります。

所長も時雨裂の柄を握って、受け止めます。

「所長！」

私は咄嗟に、愛用の暗器・九節鞭を取り出しました。

金属製の細い棒をいくつもつなぎ合わせ、先端に鋭い切っ先を着けたムチです。

私がそれを赤髪の男に向けて放つと、男は刀でそれを防御しようとしてしました。

私の九節鞭がその男の刀に巻き付きます。

すると…

「…燃えろ！」

何が起きたのか、一瞬解りませんでした。

その男の叫びと共に、刀身から炎が沸き出したのです。

私の九節鞭がその衝撃で刀からはずれます。

「…昔聞いた、“火之迦具土神”<sup>ひのかぐつち</sup>のエリウッドってのはてめえのこ  
とか！」

所長がそう言って、刀を握り直します。

その時、レイチャーⅡラインが私に接近してきました。

「悪いな、逃がすわけにはいかねえ」

その時、白鷺さんが右から、鳶さんが横から飛び出してきた、ラインの腕に組み付きます。

「くっ…なっ…」

ラインは振りほどこうとしますが、ロボットの腕力に押さえつけられ、動けないようです。

私は咄嗟にラインに接近し、腹部にパンチを入れようとします。

と、その瞬間に、細い鞭のような炎が、私の方に伸びてきました。白鷺さんが私を突き飛ばしてくれたので、私はなんとか助かりました。

“慎伸焰”…この呪刀『焰産霊』<sup>ほむすび</sup>の変幻自在の炎、いつまでも逃

れられはせぬ…」

エリウッドがそう言いました。

「玲奈、逃げてろ！」

所長がそう言って、時雨裂の刃を水平に構え、突きを繰り出します。新撰組が得意としたとされる、平突きと呼ばれる形です。

エリウッドが横に避けると、所長は横に薙ぎ払って次の攻撃に繋がります。

しかし、エリウッドの刀は振る度に炎が飛散し、所長は苦戦を強いられています。

ズシューウン！

轟音に私がハッと振り向くと、そこにはビームショットガンを握っているラインと、その隣で倒れている鳶さんの姿がありました。

「鳶さ…！」

私が叫んだ瞬間、ラインは私に接近してきました。

私は咄嗟に九節鞭を放ちます。

「ちっ、厄介な武器を持ってやがるな。だが、女には銃は使わない

主義だ…」

そう言うのと、ラインは私めがけて拳を振り上げました。

「東風さん、危ない！」

白鷺さんが飛び出してきます。

ラインは再び舌打ちすると、ビームショットガンで白鷺さんに向けました。

その時、別の方向から一筋の光が飛来しました。それはラインのビームショットガンの銃口と、白鷺さんの間を通り抜け、所長とエリウッドが戦っていた側の壁に穴を空けました。

「そこまでだ」

私はその声のする方を見ました。

そこには、長いレーザー銃剣を構えた、小次郎さんの姿がありました。

「…“独眼天龍”か…」

エリウッドが、所長から離れて間合いを取り、そう呟きます。

見ると、所々所長に斬られていたようです。

所長の方も、肩に傷があり、服が焼けこげていました。

「厄介だな…ライン、退くぞ！」

「ちっ」

そう言って、エリウツドの後に着いて、レイチャーラインも引き上げていきます。

所長も私達も、そして小次郎さんも、それを追いませんでした。

「誠、大丈夫か？」

小次郎さんが、所長に近づいて、言います。

「俺は大したことない…鳶は？」

「まだ直ります、聖山さん」

白鷺さんが、倒れている鳶さんの体を調べて言います。

鳶さんの胸には、ラインに撃たれた穴が空いていて、中の機械がはみ出していました。

「玲奈、鳶を平井の所に運べ。すぐにだ」

「はい！ 所長は…どうするんですか？」

「いいから早くしろ！ 白鷺、一緒に行け！」

「あっ、は、はい！」

「了解しました」

私と白鷺さんは、目を閉じて動かない鳶さんをエアカーに乗せ、科学省に向かいました。

「平井 久国さんをお願いします！」

私は受付の人にそう言うと、鳶さんをソファーに寝かせました。やがて平井さんの部下がやって来て、鳶さんを連れていきました。私と白鷺さんも後に続きます。

「酷くやられてるな…」

「動力炉は大丈夫か？」

エレベーターの中で、平井さんの部下達がそう話しています。

そして、平井さんの開発ラボに到着し、平井さんが早速修理に取りかかりました。

「…大丈夫ですか？」

「まあ、なんとかなるよ。ただ、時間はかかるかもしれない。帰って、聖山に伝えてくれ」

「はい、お願いします…」

私はそう言って、白鷺さんと一緒に事務所に帰ることにしました。

「Dr. 平井なら、直せるはずですよ。心配する必要はないですよ」

白鷺さんがそう言います。

「ええ、そうですね…」

私はそう言って、エアカーのエンジンを起動させました。

## 第五回・強敵、現る（後書き）

戦闘シーンなど、ちょっと不安が残ります。  
よろしければアドバイスなどをお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6150b/>

---

聖山探偵事務所

2010年10月8日22時03分発行